

松江

八雲がこよなく愛した街

小泉八雲——ラフカディオ・ハーンは、松江の自然や文化、人情の美しさを讃え、愛した。それは近代化を急いでいた日本が失いつつあった、日本人がその価値に気づかないでいたもの。現代では取り戻しようもないものばかりだ。だが今も松江には、ハーンの愛したものを大切に守っている人たちがいる。

取材・文 田中聡 写真 谷山 實



松江は、小泉八雲がこよなく愛した街。宍道湖、松江城、月照寺などの八雲に深い印象を与えた景観は、今でも観ることができ。人々の穏やかで文化を愛する気風も今なお受け継がれているという。経済的には豊かとはいえない街だが、それゆえに風土の美しさや文化の豊かさが残されてきたのかも知れない。

明治二十三年に来日したハーンは、まもなく島根県尋常中学校の英語教師として松江に赴任。それから約一年三カ月を、この「神々の国の首都」で過ごし、その体験を『知られざる日本の面影』という本にまとめた。それは松江に残る古き日本の美質にハーン自身の感性が深く同調し響きあって生まれた文学であり、日本人にとって

こそ「知られざる日本」を教えられた示唆に満ちた書でもあった。例えば、米搗ぎの音が始まって、寺の鐘、勤行の時を知らせる太鼓、物売りの声、朝日を拝む人々の拍手を打つ音、大橋を渡る人々の下駄音と、豊かな物音の連なりで街が目覚めていく過程が、朝霧に包まれた宍道湖に朝日が昇る前後の微妙に変化していく色あいの描写に重ねられて夢幻のごとく綴られ、読者は思わず松江に憧れを覚えてしまう。だが、その多くは他の町や村でも聞くことのできた音であったはずで、ほとんどの日本人はその魅力に気づくことがなかったにすぎない。ハーンは、日本人には見えない、聞こえない日本を、日本人の意識に届かせてくれたのだ。

とはいえハーンの最初の任地が

遊覧風情の高さから、松江城のお濠を周遊する。折江時代の生活の名残がうかがわれる(上)。武家屋敷の残る塩見繩手(下)。



松江であったからこそ、それほど美しい描写となりえたには違いない。ハーンにとって松江は、「現実と幻が見分け難い国——すべてが、今にも消えていく蜃気楼のよう」に思われる国」だった。美しく棚引く霞に山々が覆われ空と大地とが妖しく混ざり合う幻想的な風景の表現だが、同時に、急激な近代化の進むなかで儂く消えてゆくはずの姿だという思いも込められていただろう。

事実、松江市はすっかり変わった。ハーンが見ていた部分をみつけることはできるが、全体としてはすっかり別世界である。いや當時すでにハーンは自邸の庭を眺めながら、塀の外では「変貌してしまっただけ日本が唸りをあげている」ことを思わずにいらなかった。失われつつあるものをハーンは愛惜し、書き残した。塀の「内側にはすべてに安らぎを与える自然の平安と十六世紀の夢とがまだ残っ



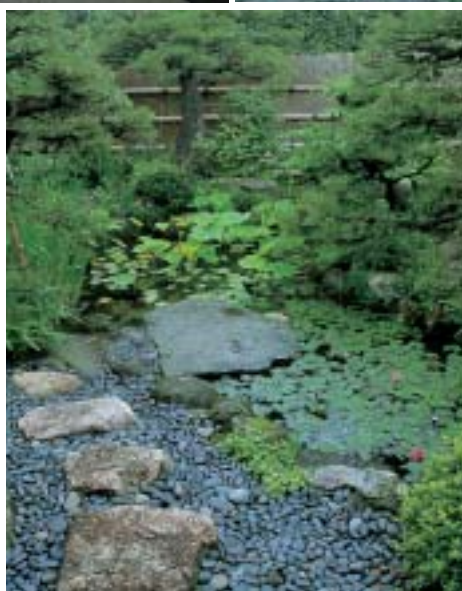
ている。大気そのものに古風な魅力があり、身のまわりには目には見えないがなつかしい何かがあるかに感じられる」と、外の近代化から隔絶された自邸の庭への愛着を記しつつ、「これらすべてが——古い家中屋敷もその庭も——永遠に消えてしまふのにそう長い歳月を要しないだろう」とも書かないではいられなかったのである。だが、その庭は今もある。

八雲が感じたものを そのまま後世に伝える

松江城の北側、お濠端の五〇〇メートルほどの「塩見繩手」は、かつて中級武士の屋敷が並んでい



小泉八雲旧居の座敷より南面、西面の庭を望む(上)。北面の庭の池には蓮と睡蓮が美しく広がり、絶えず蛙の声が聞こえる(上中)。ハーンが好んだ北面の庭を背にした根岸道子さん。ハーンはこの縁側に座って煙草を喫むのが好きだった(上右)。



小泉八雲旧居の表門(上)。「池の縁のそこかしこに、水面とほとんど同じ高さで、大きな平たい石が置かれて、その上に立ったりしゃがんだりして、池の生き物たちを眺めたり、水草の世話ができるようになっている(『日本の庭で』)」と記されたままの姿をとどめる北面の庭(左)。

た通りで、松江市の伝統美観地区に指定され、武家屋敷や美術館、松平不昧公の建てた茶室「明々庵」、小泉八雲記念館などが並んでいる。そして、八雲旧居がある。小泉セツと結婚し、明治二十四年六月から五カ月半を暮らした屋敷である。「私はすでに自分の住居が少々気に入り過ぎてしまった」と記した建物も、毎日飽かず眺めて安らぎを得ていた庭も、ハーンが暮らした

ときと変わらぬたたずまいのままに残されている。

それには、家主である根岸家歴代の知られざる努力があった。『お濠端に暮らす』という著書もある十二代当主の根岸道子さんから、その経緯をうかがった。

根岸家は、藩主の松平家が越前藩主だった頃からの家臣で、九代の小石の時代に禄高を一〇〇石から三八〇石に増え、文久二年(一八六二)に北堀に居を構えた。それが八雲旧居である。

ハーンが松江にいた頃、十代当主の干夫は神戸郡郡長をつとめ、一家で出雲市に住んでいた。それで武家屋敷に住みたいと希望していたハーンに家を貸したのだという。庭は、明治になって武士が職を失った際、小石と干夫が身体がなまならないようにと、庭師を伴って山へ行き適当な樹木を見繕うなどして、二人で思うがままに造ったものだった。庭師は伝統的な日本庭園の法則を守れと主張し、喧嘩になったこともあったそうだ。

ハーンはこの庭を「幾世代も前に世を去った」庭師の作と思いついていたが、実は同時代に生きていた侍が造った、しかも日本庭園としては破格な、むしろ英国風な

ところさえある庭だったのである。明治二十九年、干夫は八東郡郡長となり松江の自邸に戻ったが、手狭だからとその庭を潰し、建て増しして住んだ。

干夫の長男の磐井は、尋常中学校でのハーンの教え子で、熊本第五高等学校へ進み、東京帝大を出て、日銀に就職。大正二年に、松江銀行から常務取締役役に招かれて帰郷すると、地元経済を活性化すべく農漁業の振興策をあれこれと練っていたが、そうするうち、明治二十五年から四十二年までの間に三六一四人の欧米人が『知られざる日本の面影』を読んで松江を訪れたという警察の調査結果を知る。日銀時代に磐井は、丸善でハーンの著書を見つけ、そこに自分の家の庭について記されているのを見て驚いたことがあった。

「それで、どんな辺鄙なところでも、よいものであれば、それこそ世界中から人が来てくれるんだという確信を得たんですね。それから我が家を旧居として開放すれば松江も有名になるだろう、と考えたんです」

それには建物や庭を復元しなければならぬ。幸い、庭石などはすべて残されていた。ただ磐井自



旧居の至るところに中級武士の教養がうかがわれる。茶室の丸窓の枠木は、山の木をたわめて石をくくりつけておき形を定着させたという。



大正時代と推測される塩見繩手の写真と八雲旧居訪問者の芳名録(左)。同僚の武士たちが寄せ描きした花々(中)。伝わる写本類(右)。



身は中学校時代から寮に入り、以来学生時代はずっと親元を離れて暮らしており、当たり前前にそこにある実家の庭をしつくりとは見たことがなかったため、セツ夫人を招いて再現が正確かどうか確認してもらったという。正式な公開は大正十年。道子さんの生まれた年のことだった。

庭は三面あり、ハーンはそれぞれの趣きを詳しく記しているが、特に池のある北面の庭がお気に入り、学校から帰ると縁側に座って虫や蛙の声に耳を澄ましていた。そうしていれば疲れも消えたという。その庭の塀の向こうには真山が見えた。

磐井はその遠景をも含めて後世に伝えようと、裏の土地を一〇〇〇坪余りも購入し、そこに八雲記念館や公園を建設する計画を立てていた。だが個人では無理なので、大正三年に八雲会を設立し資金を募ったが、反応はなかったという。建物や、まして景観の保存活動に理解を示す人はほとんどいなかったのだ。磐井の孤軍奮闘が続く。

戦後になっても、根岸家の孤軍奮闘は続いた。「昔は、ハーンに尊敬と興味をもつて見学に来る人たちが多かった。ただ『どうぞ、ご覧ください』と言えばすんでいたんです。ですけど観光バスでツアー客が来るような時代になると、小泉八雲といっても知らない人が多くなつて、『何だ、このボロ屋は。うちのほうがよっぽど立派だ』と怒りだす人や、『入場料を返せ』と言う人まで出るようになったんです。そんな時代が長く続きましたけど、この頃やつと世の中も落ち着いて、文化に興味を持たれるようになって、ハーンを感じたようにこの庭を味わってくださったり、喜んでくださるお客様もお見えになるようになりました」

道子さんが夫の啓二さんの転職により東京から松江に移り住んだのは昭和二十一年。文士たちが多く住んでいた馬込で医師の娘として開明的な教育を受けて育った道子さんにとって、当時の松江での暮らしは「大正時代に逆戻りしたような」生活だった。例えば夫と

大正末頃になるとハーンの著作の翻訳も出て、松江を訪れる文化人が増えてきた。三〇冊あるという旧居の芳名録には、新渡戸稲造、与謝野鉄幹・晶子など歴史上の著名人の名が多く連なっている。

昭和八年になって、ようやく記念館の建設が始まった。しかし磐井は、起工の矢先に急逝する。また事情は定かでないが、記念館は根岸家の桑畑があった旧居の隣地に建設された。裏の土地は住宅地となり、もはや庭の遠景に真山を望むことはできない。

「ここは江戸時代の文化がそのまま受け継がれているんです」息子の千夫と庭を造った小石は、居室を茶室にする造作もすべて自分で行った。丸窓、にじり口、飾り棚を作り、漆で絵も描いた。残された文書類からも、武家の教養



ハーンがよく散歩した城山稲荷神社にはかつては2千を超える石狐が並んでいたといい、とくにハーンがほめたのが上のペア。

小泉八雲のひ孫にあたる民俗学者、小泉凡さん。研究室には水木しげる氏のサイン本が大切に置かれていた。



る感受性がなければ、猫に小判。ただの古い建物となる。

ハーンの五感力を伝えることで 子供たちの心を守り育てる

バーチャルな体験が増え、自然に触れる機会の少なくなった現代人は、そうした感覚の力が衰えているのではないかと危惧するハーンは、自身の経験から、大学部准教授の小泉凡さんは、二〇〇四年以来、夏休みに、子供たちにハーンの世界を伝えるための「子ども塾スーパードン」を開設している。

「小泉八雲の持っているもののなかで一番現代に継承したいのは、五感力だと考えたんです」

松江の森を二人でベアになって一人は目を閉じて歩くということをやるとき、中一の女の子が不安を訴えた。

「そして、ほとんど目が見えなかった。ほとんど目が見えなかった。一年半はすごく不安だった。うん、うん。人の気持ちが変わるようになった。その同じ子が、今度は森の匂いを感じたと言っている。普段開かれていない鼻想像力や好奇心が湧いてくると思

うんですね。目だけを働かしても好奇心や想像力はあまり豊かにならない気がします。

今年、ハーンが世界で好きな場所五つのうちの一つにあげた美保関で、塩作り、機織り、石臼挽き、米搗きなどを体験して、夜には島根県の民話に最も詳しい研究者で語り部の酒井薫美先生に、たつぷりと島根の民話を聞かせてもらおうと、主眼を聞いてもらうと、美保関の最後の四日目には、美保関の何々というテーマで皆に昔話を作ってもらいます。聞いた話に自分の魂を吹き込んで変えていく再話でもいいんですけど」

ハーンは、ケルト民族の国、アイルランドの口承文化のなかで育った。特に乳母からたくさん聞いたこと、八雲の耳がきかされたこと、「八雲の耳がきかされたこと」ではないかと、小泉さんは言う。また八雲が長男の英雄を小学校に入れた教育をした際のテキストはフェアリー・テールや民話の本だったという。

「民話を通して総合教育をしたということですね。一日三時間みっちり。それで何より想像力、そして開かれた耳、そういう五感力を

息子に継承したかったんじゃないかと思うんです。八雲のその部分で、現代社会に生かす価値のあることかなと感じています」

松江は、そうした教育の材料にはこと欠かさないだろう。

根岸道子さんは旧居が残ったことについて「これもこれもハーンのおかげです。ハーンがいらしたやらなかったら、とつづくなくなっていたと思います」と言った。屋敷も庭も消えるというハーンの子息は、ハーン自身の著作によって裏切られた。根岸磐井がその著作に出会い、また多くの読者が松江を訪れたことよってである。ハーンは今や、出雲大社と並ぶ島根県の主要な観光アイテムとなり、ハーンが賞賛した場所の多くが観光化されつつ保存されていく。ハーンが松江を守ったのである。そして今度は、ハーンを感じたことを感じようとすることで、子供たちの心を守られ育てられようとしている。ハーンと松江との出会いから生まれた、新たな美しい物語である。



月照寺の松平家六代宗むねのぶ彦ひこ宗むね蔵くら碑の大龍は夜ごと町を歩き回ったという伝説をハーンが記している。

